

サコーロ町

雷雲の電気発生機構の研究で有名なニューメキシコ鉱工大学のワークマン博士を訪ねるのが多年の念願であったが旅費も出してくれるとのことであり、昨年から留学中の北川博士から砂漠地帯のドライブに誘われたので、砂漠みたさに不便なことは覚悟の上で帰りにたっぷり四泊の予定で立寄った。

ニューメキシコの砂漠地帯を水の枯れたりオグランド河が縦断している。この河沿いの少し緑があった凹みにサコーロ町6000の人口が水を求めて生存しているといった景観である。大学は町の西側の山手にあって鉱工学部と研究所を合せた単科大学で学生も300人ばかりの小じんまりした大学であるが、一歩構内に入ってみれば校舎もスペイン風の洒落たもので中庭のサボテン類の花盛りであった。一面の芝生は毎日定刻に噴水で培われ少からぬポプラその他の植物も何等かの形で給水されて大学全体がオアシスである。研究所は冷房が効いているのでまことにしのぎよい。

ワークマン博士は学長を兼ねたワンマンだが日本人びいきで学内の空気も実によさそうである。博士に例の中谷先生とメーソン博士の渦状のディスロケーションの話をしたが案に相違して喜びもしなければ別に珍しがるで

もない。こんな筈でないと思って英語で蘊蓄を傾けて話してみるとやっと事情のみこめた。博士が数年前にこのことを予想していたことを確認し、それが今度の学会で実験的に証明されたといったら始めて相好をくずして喜んだ。こんなタイプの爺さんである。そうしてワークマン・レーノルズのイオンによる電気分離が雷雲の電気発生の主原因であるとの電気分離が雷雲の電気発生の主原因であるとの確信を堅持している。博士の装置やブルーク博士の実験装置をみせてもらったが、ここでも殆んどが手製で独創性に富んだものであった。電光の実に見事な写真をみせてもらったが、ここでよい写真のとれる理由は大気が澄んでいることと大きなレンズ（直径20cmくらい）を使用することにあるらしい。驚いたことに博士の装置の操作やブルーク・北川博士の増巾器の組立はアルバイトの物理学生が担当していた。

話に聞いていたが、米国の大都市の大学は大変居心地がよい。ワークマン博士は研究所内に居住し構内に自らが耕作する農場を持っており博士所有の鶏も芝生の上を遊んでいる。鳥も飼っているが逃げる気遣いはない。四周は砂漠であるから。北川博士はキャンパスに一戸を構え仏国製の新車を駆使して公私とも大変恵まれた研究生活である。あやかって私もニューメキシコの快適な四泊を楽しむことができた。

高等学校地学科廃止解体問題について

根 本 順 吉

12月2日14時より、本郷学生会館第2号室で、主題の件について地球物理学関係各学会の意見の交換会が行われた。出席学会は海洋学会（半沢）、火山学会（宮部）、地震学会（浅田）、測地学会（土橋、村岡）、気象学会（根本）で、火山学会の宮部直巳氏が議長となり各学会の実情を報告した。その結果、次のように意見がまとまった。

1. 今回の討議の中心となった『高等学校における地学教育の振興についての意見書』（日本地学教育研究会高等学校地学担当教室一同作成のもの）については、各

学会の意見ないし関心は、一般にあまり高くない。

2. この意見書ならびに今後のこの種の声明書をどうとりあつかうかについては、各学会の意向が大体同一方向なので、これからは地球物理学連合を通し、統一的に動くようにしたい。

3. 地学教育の振興については、各学会ともその必要性をみとめるが、地質関係が、かなり偏重されているこの意見書が無条件でみとめるわけにはいかない。高校地学科のあり方については、地球物理学連合の当番学会が各学会に意向をきいた上で、まとめてゆきたい。